



2017 年 (平成 29 年)
11月号 (No. 870)

公益社団法人
日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1部 150 円

会員の会報購読料は年会費に含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

目 次

登山学校開校	
—東海支部の新たな試み—	1
第33回全国支部懇談会を筑波山で	
開催。26支部、137名が参加	4
さんけん通信	6
日本雪崩捜索救助協議会	
「AvSAR 協議会」設立さる	7
追悼 平位 剛先生を偲ぶ	8
追悼 山岳写真を愛された 杉本誠さん	9
東西南北	10
活動報告	12
山行委員会／アルパインフォトクラブ	
支部だより	15
信濃支部	
新入会員	16
図書受入報告	16
図書紹介	17
会務報告	18
ルーム日誌	18
会員異動	19
INFORMATION	19
編集後記	19

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木……………10～20時
水・金……………13～20時
第2、第4土曜日……………閉室
第1、第3、第5土曜日……………10～18時

登山学校開校

東海支部の新たな試み

1964年に始まった東海支部の登山教室も、ここ数年の間にその活況ぶりに陰りが見えてきた。同支部では今日あるを予測し、これに代わる自主運営の登山学校を計画、本年7月、予定どおり開校に漕ぎ付けた。新たな試みとしての登山学校が目指すところを、尾上昇会員にレポートしていただいた。

登山学校運営委員会 尾上 昇

開校に至る背景

東海支部では、マスコミや公共団体の主催する文化事業の一環である「登山教室」について、委託を受けてその運営を実施してきた。歴史は古く、支部発足直後の昭和39(1964)年、朝日新聞系の文化教室の依頼に始まる。一時中断したが、平成3(1991)年から、再び朝日新聞の要請で登山教室の

運営に携わった。

その後、中高年登山ブームも相俟って、各種の機関から登山教室運営の委託依頼が相次いだ。朝日新聞のほか中日新聞、愛知県労働協会、NHKである。最盛期は、延べの受講生が年間200名を超えている。

この登山教室の実施は、支部運営に多大なメリットをもたらして



登山学校開校式に集まった受講生たち

いる。教室の卒業生の多くが支部員(日本山岳会員)に登録。この中から支部運営の中枢として、また、登山リーダーとして活躍している者が多い。さらには、委託料が支部の財政面に大きく寄与している

ことも見逃せない。運営は、支部内に設けられた登山教室委員会がその任に当たっている。このプログラムが、支部の重要事業として位置付けられてきていることは言うまでもない。

活況を呈していたこの登山教室だが、ここ数年の間に陰りが見えてきた。原因としては、次の3つが考えられる。まず中高年登山ブームが一段落したこと。次いで受講料が高くなってきたこと。これは主催者側の経費増と、交通費の高騰による。さらに、ツアー会社や登山用品会社が類似の催しを手掛けだしたこと。これらによって登山教室への応募者数が年々減少してきている。さらには、現在の風潮から、山での遭難事故の責任問題にマスコミ各社が神経質



座学と現地講習を組み合わせるスキルアップ

団体からの要請ではなく、自己責任の下で自主運営されてしかるべきであろう。登山教室の陰りは、支部における指導体制を本道に戻す良い機会であつたと言えよう。

シラバス(学習計画)の策定

シラバスは、登山教室委員会が中心となつて検討し、今年7月の開校を目標とした。予定どおり7月に開校、3ヶ月を経たが、なんとか軌道に乗っている。その要因は、登山教室の陰りに対する危機感を持つて臨んだこと、25年を越す登山教室の運営で培われたノウハウの蓄積があること、豊富な人材、特に登山教室委員会の中核メンバーの中に教育関係者がいたこと、などが挙げられよう。昨年12月の常務委員会で、登山学校の実施計画が承認された。

当初の心配は、受講希望者の応募状況であつた。50名ほどを想定したが、果たしてそれだけの応募者があるだろうか。実際の募集は、支部が全面的にバックアップし、毎年開催されている「夏山フェスティバル」の会場であつた。ところが、杞憂であつた。応募者数は100名を超した。とても100名の受け入れは困難なので、一部条件を満たさない人にはお断わりを入れた。

100名を超す応募があつた背景として考えられるのは、体系付けられた「学校」という形で山登りに真剣に取り組みたいとする潜在希望者が大勢いたこと。言い替えば、ツアー登山では物足りないのである。また、受講料の安さも魅力の一つであろう。さらには、公益社団法人が主催するという信用度の高さも一因となっているのである。7月1日と16日、2回に分けてオリエンテーションを兼ねた開校式を実施したが、応募者が1人も欠けることなく全員参加してくれた。それだけ関心の度合いの高いことが示され、応募者の真剣さがうかがわれた。支部としても、受講生を落胆させることなく、緊張感を持つて対応しなければなら

ないということを再認識した。

登山学校の概要

名称…公益社団法人日本山岳会東海支部登山学校
主催…公益社団法人日本山岳会東海支部

海支部

目的…①未組織登山者への安全登山の啓蒙 ②支部の人材の確保と育成 ③支部活動の活性化と強化

校長…高橋玲司(東海支部長)

運営…登山学校運営委員会

内容…

①7月をスタートとする1ヶ年。

②グレードを3つに分ける。

I/これから山を始めたいという人(チャレンジ教室—1年生)。登山の基礎を学ぶ。

II/登山の経験はあるが、体系的に登山を学びたい人(レベルアップ教室—2年生)。夏山縦走、テント泊や小屋泊まり登山程度を目指す。

III/ある程度の経験者で、さらなる技術修得を求める人(ステップアップ教室—3年生)。初歩の冬山体験、簡単な岩登り技術の修得を目指す。

③1教室ごとに担任(リーダー)



レベルアップ教室で登った恵那山山頂で記念撮影

- と副担任(サブリーダー)を置き、受講生を5名程度とする。
- ④月1回の山行と年数回の座学を基本とする。
- ⑤支部員・支部友も受講を可とする。
- ⑥新規の受講生は全員、支部友会に入会する。
- ⑦受講生の年齢制限を65歳までとする。

- ⑧受講料を9000円とする。ただし、支部員・支部友は年会費分を減額する。
- 以上であるが、解説を少し加えたい。
- 名称である。登山学校とは、いささか大仰ではないかとの声があった。法人資格があるわけでもないし、一般の学校と同様な体裁が整っているとは言い難い。

これに対しては、登山教室とは軌を一にする新しい取り組みであること。明日の支部を占う一大事業であること。これらの認識から「登山学校」と大見得を切った。また、運営に当たる委員会も登山学校運営委員会とした。

目的を3つ挙げ

た。安全登山の啓蒙は、公益法人活動の大きな目的の一つである。人材の確保と育成は、支部員の増強や支

部運営に携わる幹部候補生の育成と登山リーダーの育成である。支部の活性化と強化は、登山学校の運営が刺激となって図られる支部事業の活性化と財政面への寄与である。

グレードは3つに分けた。初めての試みなので、今後の検討を要するところである。最終的には、チャレンジ教室(1年生)7教室、レベルアップ教室(2年生)6教室、ステップアップ教室(3年生)1教室である。それに講師陣を加えると120名を超す大所帯となった。1教室にリーダー、サブリーダーを含めて7〜8名としたのは、少数指導体制を取ることにより丁寧な指導が可能となり、教室単位での信頼関係も深まると考えているからである。

開校して3ヶ月、そこから見えてくる課題も多い。講師陣の不足、教室担任(リーダー、サブリーダー)の負担の重さ、登山口までの交通手段などの確保、ボランティアとしての限界、事故への対応、指導技術の統一、受講生の体力や経験のばらつきなどが、今後、詰めていかななくてはならない課題である。

東海支部は、前述したようにプロジェクトを支部の将来を担う最重要事業として位置付け、初年度の反省も含めて、より充実した、クオリティの高い登山学校への進化を目指している。すでに第Ⅱ期に向けた準備を始めているところである。

「山の日」歳事記 十一月 雪のたより、季節の移ろいは山から

今年の雪のたより、初冠雪は9月29日、山岳列島北端の利尻山からやって来た。本州では岩木山、八甲田山と続き、富士山は例年より遅れて10月23日。紅葉

を一瞬にして消し去り、冬は山から降りて来る。寒さを気遣う年齢から冬山登山を待つ元氣者まで、お互い体調を整えて、安全の冬に備えたい。(隆)

REPORT

第33回全国支部懇談会を筑波山で開催。 26支部、137名が参加

茨城支部 町澤健司

第33回全国支部懇談会は、平成29年10月13日(金)～14日(土)、茨城県つくば市内の、筑波山中腹の「つくばグランドホテル」を会場に開催された。茨城支部は本年6月に創立10周年を迎えたが、この記念すべき年に、全国の26支部から137名の会員・会友をお迎えし、交流・懇親を深めることができた。

第1日(13日)

13時10分、ホテル内大広間「紫峰」(紫峰とは筑波山の雅称)において、茨城支部・諏訪警委員の司会進行により開会式が行なわれ、浅野勝己・茨城支部長による開会並びに歓迎の挨拶に続き、小林政志・日本山岳会会長の「ご来賓挨拶をいただいた。ご挨拶の中で、茨城支部の中心的活動である、2ヶ月ごとの「市民公開講演会」と年2回の「自閉症者支援協力登山」活動を、公益性の高い活動としてご紹介いただいた。その後、3人の講師による講演会に移った。

講演(1)は「古代の山の信仰―筑

波山を中心として」と題して、郷土史家の井坂敦実氏(元・筑波町長)が、筑波山を巡る古代の山の信仰の歴史について解説された。筑波山は、万葉の時代には、「筑波岳(嶽)」と称され、「岳嶽」が用いられたことに特異性があり、高い山ではないが、厳しさ・険しさとともに、崇高さを兼ね備えた山として親しまれたこと。筑波山の信仰は、京都の上・下賀茂神社に現在まで伝わる「ミアレ(御生れ)神事」(葵祭関連)と共通する信仰に根付いていることなどの話があり、筑波山が男女二神の山で、その子神がミアレするヤマを人々が崇拝し、子神を生む母神を「山の神」として祀ったという、山岳信仰についての講話をおもしろく拝聴した。

また、『万葉集』に詠まれた歌が、富士山の13首に比し、筑波山が25首であるという事実は、まさに地元としては誇りに感じた。

講演(2)は「我が国の火山の現況…富士山も噴火するのか」と題して、



相撲甚句などが披露され、盛り上がった懇親会

山梨県富士山科学研究所所長(前・火山噴火予知連絡会会長・藤井敏嗣氏に最近の日本の火山活動の動向と、火山噴火予知の困難性などを解説いただいた。その上で、富士山の大噴火の見通しとして、宝永規模の噴火は、いつ起きてもおかしくない時期にきている。休止期間が長かったことから、大規模な噴火になることが予想され、多くのインフラに依存している現代社会では、被害は甚大なものが予想される、と警告された。新燃岳の噴火が目新しいところであり、御嶽山噴火など、国内外において関心の高いテーマを、数百年から一千数百年の経緯を踏まえて解説

いただいたが、今回の講演は、誠にタイムリーなものであった。

講演(3)は「100年目の剣岳三角点設置」と題して、茨城支部の山田明会員による実録DVD映写と、剣岳三角点設置に関する話題であった。山田会員は、国土地理院北陸地方測量部在職時に、大先輩の柴崎芳太郎測量官が果たせなかった剣岳山頂への三角点設置を計画し、柴崎測量官の剣岳初登頂から100年目に、地元の高校生たちの協力を得て三等三角点を剣岳山頂に設置し、標高2999mを確定した。この経緯とエピソードについて映像を交えて解説され、一同に感動を与えた。講演終了後、茨城支部の奥井清・副支部長の挨拶により講演会を閉会とした。

休憩・入浴の後、18時半より夕食・懇親会が開催された。懇親会開会に先立ち、茨城県牛久市在住の愛好家連による「相撲甚句」数句の披露があった。詠われた甚句は、地元牛久市出身の横綱「稀勢の里」および土浦市出身の大関「高安」をたたえ、奮起を促す応援歌であったが、なかなか聴けない独特の音曲であった。

懇親会では、主催者を代表して

星埜由尚・茨城支部顧問（前支部長）による歓迎の挨拶と、重廣恒夫・日本山岳会副会長によりご来賓挨拶と乾杯のご発声をいただいたのち宴会となった。全国各支部からの自慢の地酒が振る舞われ、会員相互の交流が深められた。

宴たけなわのころ、次回、全国支部懇談会を主催される北海道支部の西山泰正支部長による懇談会開催の案内と、企画の概要説明があった。また、当地の伝統芸能である「がまの油売り口上」が、細田美峰・口上師（がま口上保存会所属の実演により披露された。

懇親会の終盤には、舞台上にて各支部の集合写真撮影会となり、その後、茨城支部の高木康雄・総務委員長の挨拶で中締めとした。

第2日（14日）

雨も小康状態となつて、曇天ながら筑波山トレッキングには支障ない天候となった。山行・見学コースは、全部で6コースを準備した。大勢が希望された「筑波山直登コース（Aコース）」は、（A-1班：26名）（A-2班：28名）（A-3班：24名）の3班に分かれて、間隔を開けて出発した。このコースは通称「御幸ヶ原コース」と言い、一番人

気のコースである。

ホテルの玄関で班別集合写真を撮り、筑波山神社（標高260m）の参道を登って、筑波山神社に参拝したのち、ケーブルカーの軌道沿いの登山路を登る。ケーブルカーの山頂駅のある御幸ヶ原（標高800m）は、西に男体山（標高871m）、東に女体山（標高877m）を仰ぐ、鞍部地形となつている。途中、カゴノキ、スタジイなどの暖地性の木々の間を登り、モミ、アカガシの間を通過して、森林帯の急傾斜の階段を経て、御幸ヶ原に至った。そこから20分ほどで男体山の山頂に達し、男体山御本殿にて集合写真を撮った。



筑波山登山を前に、ホテル玄関でCコース一行の記念撮影

晴れた日には、関東平野の大自然が展開するところであるが、あいにくの曇天で、展望が悪く、御幸ヶ原にて小一時間ほどの昼食休憩をとり、途中、女体山山頂を経て下山を開始した。下山路は、Bコースと同じ登山路を下った。

Bコースは、9名で通称「白雲橋コース」を登った。このコースは、筑波山神社門前を迂回し、白雲橋を渡ることからこの名がある。ヒノキの森林の中をゆつくりと登り、途中、ロープウェイの駅のあるつじヶ丘からの登山路と合流し、女体山の頂上を目指す。この合流点には弁天茶屋があったが、現在は基礎のみの跡地である（標高700m）。ここから筑波山特有の巨岩が連なる。前日の井坂敦実氏の講演にあった「弁慶七戻り」「母の胎内くぐり」「陰陽石」「出船入船」「北斗岩」「屏風岩」などの名が付けられている。巨岩の間を歩き、ほどなくして女体山の頂上に出る。ここにも女体山御本殿があり、参拝の後、御幸ヶ原へ歩を進め、Aコースと出会うこととなる。昼食休憩ののち、Bコースは、Aコースの登山路である「御幸ヶ原コース」を下山した。

Cコースは22名で、筑波山神社参拝後、神社横の宮脇駅（標高300m）よりケーブルカーにて御幸ヶ原に一気に登った後、御幸ヶ原を起点・終点とする筑波山自然研究路（周1.4km）を周回散策した。御幸ヶ原に登った5コース全員には、御幸ヶ原の南東部にある「紫峰杉」（高さ約40m・幹周り約7m・推定樹齢800年）を案内した。根元には、男女川みなのがわの源流が湧き出ている。

山行を行わないDコースは総勢20名。ホテルから車で国土地理院および産業技術総合研究所の地質標本館を案内した。各施設では、登山とも関係の深い測量・地図および地質や岩石についての解説・展示があった。

このように各コースとも予定どおりの午後2～3時ごろ、無事山行や見学を終えることができ、全国支部懇談会は散会となった。

このたび茨城支部創立10年に当たり、第33回全国支部懇談会を無事開催できたことは、茨城支部にとつて誠に意義深いことであり、ご協力いただいた本部並びに全国支部の皆様へ、衷心より感謝申し上げます。（茨城支部総務委員）

さんけん通信

秋の徳本峠越えに参加、焼岳に登る

峠原直実・石崎徳子

9月30日～10月1日、山研運営委員会主催の「秋の徳本峠越え」の山行に委員の薦めで参加した。安曇支所駐車場で前泊し、翌日の山行を楽しみに早々に眠りにつく。

翌朝は5時30分集合、6時過ぎに出発。心地良い川のせせらぎをBGMに、島々谷林道を諸先輩たちの話を聞きながら歩く。昼食場所の岩魚留小屋まで、いくつかの橋を渡りながら沢沿いの道を歩くこと約3時間。食後にカツラの巨木の前で記念撮影。九十九折りの急登の途中の力水まで歩いて、冷たく美味しい水でひと息つき、ここからは各自のペースで歩くことに。途中、中ノ沢を越え30分ほど歩くと、新たに架橋作業をしている関係者の方たちと出会う。先に見える橋は細い丸太を組んだ危なっかしい橋だったので、安全に渡れる橋を架けているとのこと。ボランティアで登山道を整備してくる方たちのお陰で安全な登山が楽しめるということに感謝。

峠に近づくとつれ紅く色付いた

葉がチラホラと目に飛び込んでき

て、峠からの景色を期待しながら足を進める。期待どおり徳本峠からの景色は大変素晴らしく感動。上高地に向かっての下山は晴天に恵まれたので、明神岳や穂高連峰の稜線を見ながら歩くことができた。山研に着いてお風呂を使わせていただき、美味しい料理をいただきながらいろいろと山の話をお聞きし、楽しい1日を過ごせた。

(峠原・記)

翌朝6時に山研を出発。委員の方に新中ノ湯ルートで焼岳登山口まで送っていただく。早朝発の私たちのために朝食を準備していただいたり、車で送っていただいたり、また、2人とも初めての焼岳登山のため、多くの方々にアドバイスをいただいたりと、登山口に向かう車中で、とてもありがたかった。初日に続き見事な晴天。7時前に登山口に到着し出発。活火山の焼岳は現在、噴火警戒レベル1とのこと。やや急な登山道を登ること約1時間半で広場に到着。ここ



岩魚留小屋に向かって登高する参加者たち

からは視界が開け、噴煙を上げる焼岳山頂が望め、山腹のナナカマドの紅葉が美しかった。その後も休憩を入れながらほぼコースタイムどおりに進む。10時前に北峰山頂に到着。風向きも良く、あまり噴煙を気にせずに南峰、火口湖など火山ならではの景色を満喫した。下山は焼岳小屋経由で上高地バス・ターミナルへ。焼岳小屋までは視界を遮るものがなく、上高地と周辺の山々を堪能する。焼岳小屋から先は数ヶ所のハシゴや栈橋、鎖場が登場。その難所を越えようと巨木の樹林帯で、それを抜けて田代橋に無事到着。帰路のバス整理券を求めてバス・ターミナルへ急

行した。

初めての徳本峠越え、山研宿泊、焼岳登山と、大変充実した時間を持てたことに、関係者各位に感謝申し上げます。

(石崎・記)

今年も山研のご利用
ありがとうございました

山研運営委員一同

山研は、11月17日の右岸水道本管の水抜きとエア送りの作業を残して、10月28日・29日の2日間にわたって閉所作業を行ないました。6ヶ月間、大雨の日が多かったにもかかわらず、多くの会員の方々にご利用いただいたことに感謝を込めながら、清掃、本館水道とミニ水力の水抜き、雪囲い板の設置などの作業を手分けして、全員ケガもなく無事終えることができました。一番心配だった台風接近による暴風雨被害や上高地線の通行止めもなく、大雨のなか帰宅の途に就きました。

来年4月の開所まで、山研は長い眠りにつきます。来春も皆様のご利用を心よりお待ちしております。ありがとうございます。

COUNCIL

日本雪崩搜索救助協議会
「AvSAR協議会」設立さる

設立までの経緯と趣旨

2017年1月初めに、日本雪崩ネットワークの出川氏からICS (Incident Command Systemとは、アメリカで開発された災害現場における標準化されたマネージメント・システム) に基づく雪崩搜索救助訓練コースの創設に関わるAvSAR標準化委員会に、日本山岳会の立場で出席しませんが、との連絡をいただいた。委員会開催の意図は、冬季のフィールドに様々な態様で出る人が増え、人気が発生しているが、組織的搜索救助が必ずしも上手く機能していないのが現状である。この現状に対して、雪崩搜索救助を標準化して、雪崩事故現場で有効に活動できる人材の育成と知識・技術の浸透を図り、一人でも多くの命を助ける環境の構築を図ろうというもの。

2017年2月6日から8日の3日間、AvSAR標準化委員会の活動の第1回として、群馬県水

東 秀訓

上町でガース・リムキー氏 (CAAI Parks Canada) を講師に迎え、日本山岳ガイド協会・日本山岳協会・日本雪崩ネットワーク・日本山岳会から雪崩搜索の教育的立場にあるメンバーが集まり、AvSARテストコースが実施された。内容は基礎編として雪崩ビーコンの仕組み・機能確認・搜索の段階の基本的な確認 (今までの搜索事例から、二次遭難の防止のためにメンバー・スキルを標準化することが重要で、カリキュラムに組み込まれていると説明があった)。講習の技術的な核には複数埋没の搜索方法 (ビーコンの特殊な使用法と搜索の戦術的な意思決定 (トリアージ) を含む) が置かれていた。この講習後、受講したメンバーにより以下の点を確認した。

* 社会体制等が異なるので、国際標準と表現できる雪崩搜索救助プログラムはない。

* 日本の状況に合った独自の雪崩搜索救助プログラムを構築する必要がある。

要がある。

この認識の下に各関連団体が横断的に協力して日本雪崩搜索救助協議会の設立を図ることが必要との合意に至り、参加者が各自の所属団体に働き掛けることとなった。当会での承認と技術委員の選出

日本山岳会においては、9月13日の理事会で中山理事より内容を説明し、「日本の山岳関係団体がまとまって協議会を創り、標準化された雪崩救助方法を策定し、その手順を訓練する場をつくり、有益な救助ができる登山者を育てる」という趣旨に賛同していただき、加盟が認められることとなった。同時に協議会の技術委員として以下の3名を選出した。東秀訓 (58歳) 学生部部長、長野県山岳総合センター・アドバイザー／工藤嘉高 (44歳) 青年部、プロガイド、北海道支部にて遭難対策に携わる／菊地信宏 (43歳) 青年部、プロガイド、スキーパトロール。

日本雪崩搜索救助協議会の組織
名称…日本雪崩搜索救助協議会 (英文) Japan AvSAR Council 略称 AvSAR 協議会

目的…大規模な雪崩事故現場にも対応できる、組織的な搜索救助方

法の標準化およびその訓練コースを実施することで、日本における雪崩現場での戦略的な搜索救助活動を実現するとともに、プログラムの継続的な更新によって国際的な機関の出す勧告への対応を行なうことを目的とする。

会員の構成…本会は雪崩搜索救助活動の展開を通じてその高度化・標準化に貢献する意思のある組織および団体を会員とする。現段階での加盟団体は日本山岳ガイド協会、日本山岳・スポーツクライミング協会、日本山岳会、日本雪崩ネットワーク、長野県山岳総合センター、日本勤労者山岳連盟。

役員構成…代表理事・武川俊二、理事・町田幸男、今滝郁夫、東秀訓、川嶋高志、出川あずさ、監事・西内博、五月女行徳 (所属団体略)

今後の活動計画

- (1) AvSARマニュアル制作／2017年10月～12月。
- (2) AvSAR上級コース講師の研修会／2017年12月予定。
- (3) AvSAR上級コース／2018年2月予定。

なお、AvSAR基礎コースは会員団体で実施することになっており、現在1～2月に試行の予定。

追

OBITUARY

悼

平位 剛先生を偲ぶ

八幡 浩



平位 剛(ひらい・ごう)

会員番号6078、永年会員

1931年 広島市生まれ
 1967年 広島大学医学部山岳会小ノビール遠
 1969年 征隊(I)隊長 6392m峰北面新登頂
 1971年 広島大学医学部山岳会小ノビール遠
 征隊(II)隊長 6020m峰初登頂
 1976年 広島大学医学部山岳会チトラル北西
 探路隊1976隊長
 1979年 広島大学医学部山岳会チトラル北西
 探路隊1979隊長
 その後、チトラル北部山岳地帯に10回、
 1998年からワハン回廊へ11回踏査
 著書:『禁断のアフガーニスターン・パミール
 紀行』『ワハン回廊』
 第7回秩父宮記念山岳賞受賞、第62回
 中国文化賞受賞

昭和41(1966)年3月3日、
 広島大学医学部の受験場。雪が降
 っているなか、白い半そでカッタ
 ー姿の試験官がいた。この白い半
 そでの試験官が平位剛先生(以下、
 先生)であった。以来五十有余年、
 可愛がつてもらった。厳しくも心
 優しい先輩であり、優秀な医師で
 あり、教師であった。

1967年、広島大学ヒンドウ
 ークシユ遠征隊に医師として参加
 するも頂上には行けず、以来、隊
 付医師が不要の、全員医師の遠征
 隊で行くことを決意された。翌年
 夏、先生はアフガニスタン・カプー
 ルでワハン回廊の入域内諾を得て
 帰国。その後、大車輪で遠征準備を
 行ない、隊員4名で1969年、ア
 フガニスタン入りした。

7月14日、カプールを出発。22
 日、ワハン回廊入り口のハンドウ
 ード到着、PAMERという標識を
 見て感激した。24日から西方のイ
 スムルグ谷を遡行し、27日、455
 0m地点にBC設営。31日、460
 0m地点にC1設営。8月1日、貝
 殻氷河と名付けた氷河上5000
 m地点にC2設営。2日、ツェル
 ト1枚のラッシュ・アタックで北面
 の高度差1300mの雪・氷の斜
 面を登り始めた。3日間のビバ
 ークで6392m峰に登頂した。頂
 上に遺留物なし。初登頂と信じ、下
 山開始。

1ビバークした翌朝、5700
 m地点で1名滑落、アンザイレ
 ンしていた3人で一緒に落ちた。雪
 氷面を跳ねながら落ちていたらしく、
 ドスンドスンと落ちていった
 ことを憶えている。3回目のドス
 ンの後、ゴロゴロと体が転がり出
 し、あわてて手足を広げ、止まっ
 てくれと祈った。祈りが通じたの
 か、傾斜が緩くなった雪面で3人
 とも停止した。棚状になった雪面
 であった。先生の「オーイ八幡、オ
 ーイ土石川」の呼び声に返事を返
 した。下山して分かったが、先生
 は右脛骨果部骨折で、右足が使え
 ない状態。土石川は左大腿部裂症
 を生じており、八幡は前額裂傷で、
 顔の下雪面が赤く染まっていた。
 5400m付近と思われる、ここ
 から貝殻氷河上のC2まで3人の
 死に物狂いの下降が始まった。幸
 いフィックス・ロープを張った一部
 を除いてすっかりした雪面で、打
 ち込んだピッケルで確保し、スタ
 カットで下りていった。通常なら
 1日を下りられる高度差であるが、
 この日は200m下りた所でビバ
 ーク、BCのライトが目染みだ。
 腹も空き、学生2人がベソをか
 いていると、先生のポケットから粉
 ミルク1人分、乾パン9個、蜂蜜3
 袋が出てきた。たちまち学生は元
 気を取り戻した。食料は底をつ
 いてはいたが、不思議なポケ
 ットであった。

翌日、無事貝殻氷河に下りるこ
 とができた。帰路、カプールから
 ペシヤワールまでの双発飛行機の
 エンジンが1つ止まった。乗客が
 騒ぐなか、我々4人は不死を確信
 し、悠然としておれた。

帰国後、先生は骨折の手術を受
 け、少し足をひきずるようになって
 した。その後、先生はワハン回廊の
 探検的踏査に毎年の夏休暇をあて、
 成果を上げられた。国民学校5年
 時にゴードン大佐の『世界の屋根』
 を読み、この地を夢見た少年は、長
 じくbetween the OXUS and the
 INDUSの地を、生涯かけて探査さ
 れた。

合掌

山岳写真を愛された 杉本 誠さん

水越 武



杉本 誠 (すぎもと・まこと)

1927年 愛知県豊田生まれ。
1952年 中日新聞社入社。
1962年 東京新聞出版局「岳人」編集長となる。
1984年 中日新聞社を定年退職。
1985年 「山の写真と写真家たち」(講談社)を出版。
1987年 トリノ山岳博物館の所蔵品による「山岳写真の源流 ビットリオ・セツラ写真展」を豊田市で開催。
1989年 「フォスコ・マライーニ写真展」開催(京都、豊田、札幌を巡回)。
1996年 「ウェストンの見た明治・大正の日本」展開催(豊田市美術館)。
1997年 同展(東京都写真美術館)。
1998年 「日本の山岳写真80年」展開催(豊田市美術館)。
2007年 同展(トリノ山岳博物館)。
2009年 収集したガラス乾板から起こしたプリン537点を長野県安曇野市に寄贈。

山岳写真の歴史研究家として知られる杉本誠さんが、8月11日に豊田市の生家で90歳で亡くなられた。お盆と重なったこともあつて葬儀に参列できず、私が何度かお邪魔した母屋で仏前にお線香を上げることができたのは、もう蟬時雨も寂しくなった秋風が立つころだった。

杉本さんと初めてお会いしたのは1979年、私の故郷・豊橋での「カラコルム五大氷河学術踏査」の報告を兼ねた写真展会場に、中日新聞の美術記者として訪ねてくださったときである。杉本さんは『岳人』の編集長を長く務められたが、私は「日本山岳史ノート」など

を読んでもその名をよく知っていたこともあつて、緊張して臨んだ。丁寧に作品を見ていただいた後、ギャラリーから場所を移し、経験したことのないような入念な聞き取りを受けた。それは新聞記者らしい注意深く、緻密なものだったことを鮮明に覚えている。取材を終えたその足で近くの市役所に寄つて、私が疎開先から戻った年を確かめ、名古屋に帰られたことを後から知った。翌日、その記事が紙面を飾ったが、これも今から考えると、私のヒマラヤの山岳写真が一人でも多くの人の目に触れられるようにという、温かい配慮であつたことに気づく。それから半世紀、親しくさせていただき、たくさんの優しい励ましを受けた。

杉本さんは80代を迎えられてからはすべての公務から退かれ、執筆活動からも離れられた。それは見事と言うほかに、大いに学ぶべきことと肝に銘じた。ときたまお会いすると、写真や山のことよりも民俗学に關しての話題が多かった。長く「山村民俗の会」にも所属されていて、『飛騨の民具』(矢来書院、1977年)などの著書もある。

杉本さんと山との結び付きは、中日新聞から東京の出版局『岳人』編集部に移られた後からだと思われる。まずは誰も手を付けていなかった日本の山岳写真史、畢生の大作ともいえる『山の写真と写真家たち』(講談社、1985年)から話を進めたい。

私はこの著書の基になったものには『岳人』で目を通していたが、寝るのも惜しいほどに引き込まれて読んだ。日本の近代登山の黎明期の明治時代から現代まで、主だった山岳写真家と言われる人たちが時代順に取り上げられている。それは直接インタビュールされているためかリアリティがあり、文章から作者の体温や感動が伝わってくるようだ。長い歳月(23年)を費やし、様々な考察を試みた労作であるが、ほとんどの方が故人とな

った今、本当に貴重な記録となった。後書きで「乾板探しに始まり、乾板探しに終わった」と言わしめたほどの困難な仕事であつたが、それを支えたものは、山岳写真に対する深い理解と愛情であつたと私は信じる。

もう一つ、杉本さんの仕事で忘れてならないものに写真展の企画がある。60歳を過ぎてから国内外で山岳写真の展覧会を企画された。日本の古い山の写真などを海外に紹介され、外国からも持ち込み、国際交流を進められた。ウェストン、ヴィットリオ・セツラ、フォスコ・マライーニなどである。マライーニ展は京都、豊田など縁のある所で開催された。

私はマライーニさんが1938年に来日して、最初に研究生活をされた札幌で開けないかと考え、いろいろな方の力を借りてなんとか実現した。杉本さんはとても喜ばれ、北海道まで来てくださった。そのとき昔の山岳写真界の話にゆつくり耳を傾けた。どんな道にしろ実作者には歴史観が求められ、先人の歩みをたどることで、これから進むべき道が見えてくる。

N 東北 S 南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

全国のウェストン祭についての一考察

早田道治

今年も6月3日と4日に上高地で第71回ウェストン祭が日本山岳会によって盛大に開催された。このことは日本山岳会会員のみならず、山岳関係者はもちろんのこと多くの方々はご存じである。

このウェストン祭についていろいろ調べてみると、全国各地でウェストン祭が開催されている。

まずは岐阜県で開催されている中津川ウェストン祭について簡単に紹介したい。

1983(明治26)年5月11日に、W・ウェストンが恵那山に登頂したのを記念して、中津川観光協会により2001(平成13)年、恵那山登山口である中津川市の川上かわかみに「恵那山ウェストン公園」が整備さ

れた。そこにウェストンの胸像を設置し、以後毎年5月11日に「恵那山ウェストン祭」が盛大に開催されている。ウェストンが日本山岳会設立に尽力された関係上、日本山岳会岐阜支部もお招きいただき毎年参加しているが、昨年から尾上昇・元日本山岳会会長にも参加いただき、祝辞を頂戴している。キリスト教の宣教師であるウェストン卿の胸像の前に祭壇を置き、恵那神社の神主による神事が執り行なわれ、多くの各界参加者の玉串奉奠ほうてんが厳かに行なわれることは、誠に微笑ましい風景である。

この行事では恵那山の開山に際し登山の安全が祈願されている。さて、全国各地で開催されているウェストン祭は8ヶ所あるといわれている。小生が確認している各地のウェストン祭は下記のとおりである。北から簡単に紹介してみるのが、誤りや抜けているものが

あればご指摘いただきたい。

① 青森ウェストン祭

趣旨が全国のウェストン祭と異なり、謝恩目的である。すなわち1902(明治35)年に青森で起きた飢饉の際にウェストンは自ら調査に訪れ、その惨状を新聞に報告し、本国英国やほかの外国人にまで救援活動を広げている。これらの救援活動を行なったことに感謝して、青森県三戸郡新郷村で毎年行なわれている。式後、戸来岳に登山している。

② 海のウェストン祭

ウェストンは「親不知が日本アルプスの起点である」という言葉を残している。これを縁にカタクリクラブ会長・小野健氏が提唱して海のウェストン祭が毎年開催される。オカリナ演奏、詩吟、そして全員で「雪山賛歌」を合唱、この日山開きとなる白鳥山へ登山している。このウェストン像は「日本唯一の全身像」といわれている。

③ 上高地ウェストン祭

日本アルプスを世界に広く紹介したウェストンの功績を称え、毎年6月の第1日曜日に上高地のレリーフ前で開催する日本最大のウェストン祭で、山岳関係者のみならず、多くの人々に周知されている。日本山岳会の設立に関わり、また、日本の山々を広く世界に紹介した功績を偲び、本会主催で開かれていることは紹介するまでもない。

④ ミセス・ウェストン祭

長野市の旧戸隠村にある戸隠キャンプ場で毎年8月の第1土曜日に、戸隠山と高妻山に初めて登頂した外国人女性のエミリー・ウェストンを偲ぶ会である。彼女はウェストンの妻であり、ロッククライマーでもあった。そこにはミセス・ウェストン碑がある。

⑤ 中央アルプス・ウェストン祭

ウェストンの中央アルプス登頂から120年を記念して2011年から開催されているイベントである。ウェストンは1891(明治24)年8月12日、木曾上松の寝覚ノ床から上松登山口を経由し駒ヶ岳に登頂後、権現づるね登山口へ下山、さらに伊那郡宿まで、今であれば17時間掛かる所を1日で走破している。今と違い判然としないう登山道を驚異的な速さで歩いている。このイベントは2日間行なわれ、たとえば2015年には故・田部井淳子さんの講演やミニコン

サート、翌日は千疊敷で記念式典を開催し、駒ヶ岳に登山している。

⑥ウエストンと天竜峡

1891年と93年の2回にわたりウエストンは「天竜舟下り」を経験している。彼は著書の中で「高く狭い青空を仰ぎながら、雄大で荒々しい岩の間を通り抜け、早瀬を矢のように走り下る激流の旅は、最高であった」と記し、そのときの様子を母国に伝えている。

それを記念して、時又港にウォルター・ウエストン記念碑が建てられている。

⑦山梨県のウエストン・レリーフ

1904(明治37)年にウエストンは北岳に登頂し、世界に紹介している。これを記念して山梨県南アルプス市のアルペンプラザ広河原の前に、2001(平成元)年、ウエストン・レリーフが設置された。

⑧宮崎ウエストン祭

1890(明治23)年、ウエストンは祖母山に登頂、宮崎県西臼杵郡高千穂町を訪れている。これを記念して五ヶ所高原三秀台にて宮崎ウエストン祭を、日本山岳会宮崎支部主催で毎年11月上旬に開催している。1966年、ウエストン生誕の地からヨーク石の提供を受

けてウエストン碑が作られ、その前で点鐘、献花、ウエストンの歌を合唱、祖母山に記念登山している。

以上、ウエストンにまつわるイベントを簡単に説明してみた。このように愛され崇められている外国人は珍しいと言っても過言ではない。これからもこれらの行事は盛大に開催されることは間違いないと言えよう。ここで提案したいことは、日本山岳会の音頭取りで「ウエストン祭サミット」を開催したら、と提案したい。

これにより日本山岳会各支部との親睦、連携、さらにこれにご尽力いただいている各団体との開催の協力など、各地のウエストン祭の活性化、さらに登山愛好家、一般の方々への登山の啓蒙などを通じて恩人ウエストン卿への感謝としたいと考えている。

W・ウエストンの名誉会員章のいふと

長田義則

W・ウエストンの研究家で知られる川村宏会員からお尋ねの手紙をいただいたのは、ひと昔前の平

成17年のことだった。

それはウエストンが日本山岳会の名誉会員に推薦された通説の記録は明治43年3月だが、改めて古い『山岳』5-1を読み返すと、ウエストンが「……1月12日ロンドン日本協会にて八年間の日本アルプス探険及び登山旅行を講演した時に、着用した名誉会員章を聴衆者に示され、皆を驚かせた……」との記録の違いを指摘したお尋ねだった。

『山岳』5-1にはウエストンの肖像写真や英文での自伝が初めて掲載され、巻末の会報欄には「名誉会員推薦」「名誉会員W・ウエストン氏略歴及び自伝」が紹介されている。この『山岳』の付録に「1月27日現在の会員名簿」(※1)があり、それにウエストンがすでに名誉会員としての名前を見付けたので、川村氏に資料のコピーを送達した。会報欄の「会員消息」「ウエストン氏登山談」にも、本会名誉会員ウエストン氏……の表示が使われている。

山岳会は明治42年5月の第2大会で日本山岳会と改称され、会員章(旧)を作製して実費の頒布を發表している。会員章は名誉会員・

特別会員・正会員・役員の4種を作り、7月12日付で会員章第1号が発起人の河田黙(イロハ順に習い)の手に渡った。待たれた会員章の着用では『山岳』63年所収の赤石岳山頂の記念写真(明治42年7月27日・高野鷹蔵撮影)に中村清太郎、三枝威之介の胸にあるバッジの着用が最初の記録といえる。

さて、本題はウエストンの名誉会員が本会からいつ推薦され、名誉会員章が渡されたのか?……

会報欄の自伝の訳文には、「W・ウエストンはスイスのホテルに滞在していて、9月5日に本会に送

るべく自伝を起草している」。

これは本会がウェストン氏を名誉会員にしたので、写真と略歴書を送るよう要請したものであり、筆者の推測では明治42年5月に会員章作製の発表があつて、その頒布を7月12日以降に実施したのと同時期に、ウェストンにも名誉会員の推薦を、名誉会員章の送付を

もつて通知したものと考える。

研究家の川村氏とは、従来の通説記録より早い期日の明治42年某日であろうことに一致を見たけれど、双方の展開した考察ではまだその期日の確定に至っていない。
付録 ※1の会員名簿は、松田雄一名誉会員の筆跡で1998年12月14日、柏木宏信氏寄贈とある。

活動報告

日本山岳会
各委員会、同好会の
活動報告です。

山行委員会

中央アルプス・越百山 空木岳（8月18～20日）

「本日は晴天なり」とありたかったが、あいにくの雨。中央本線上松駅出発。伊奈川ダム駐車場でタクシーを降りてからは、今朝沢川の怒り狂い岩にぶつかり渦巻く流れを左に見ながら、雷鳴轟く林道を歩く。しばらく行くとスリートーンカラーの車がブルーシートの上に置いてあった。越百小屋の名

がある。これより登山道。まさにカミナリ様に向かつて歩を進めることとなった。霧の展望台を過ぎると、いやに目立つカニコウモリが盛る静かな森林の中、越百小屋が見えてきた。5時間。

泥んこの雨具やびつしよりの着衣を脱ぎ捨て、乾いた着衣でないと宿には入れない。小屋のご主人の決めごとと逆らつてはいけないのだ。薄暗い小屋の中で2時から懇親会が始まった。

歩いている間、「東京音頭」が頭

の中を巡り巡ったSさんの話。K理事のお邪魔したN邸が、塀の中からそびえ立ち、3階以上は霧で見えなかった、とのお話は下山してなおも霧の中。なんとお洒落な住まいだろう、私は驚いた。

濡れ物は乾かない。明日も雨だろうか。「このまま着るしかないね、着干しだよ」、「ファイントラックがないわ」、「俺の靴下はどこだ？」狭い小屋のストーブを囲んで雨を呪う会話が続く。夕食は寿司飯とおでん。ご主人自慢(?)のシュラフで7時半就寝。

空木岳を目指す翌朝は曇り。濡れた衣服で5時45分出発。9時ごろから暑くなってきた。雨具の上着を脱ぎ、下衣を脱ぎ、乾いてきた着衣も汗でびつしより。一瞬晴れるが変わらずガスで遠方は望めない。水はけの良い花崗岩の細かい砂状の登りは手強いぞ。鎖場が出てきた。岩場は気が抜けない。注意を怠らず、岩を踏み外さずに、素早く移動する。岩の間を、身体をくねらせ、また、へつるように通過する。赤柳岳でお昼。見えない越百山をバックに「タラバガニー」つて言うのよ、とシャッターを押すRちゃん。トウヤクリンドウが顔を出してき

た。タケシマランは実を真っ赤にし、ウラシマツツジはいつ葉を赤く染めるか模索中のような。季節は確実に移ろいゆこうとしている。

南駒ヶ岳を過ぎ、空木岳に2時ごろ到着。2864m。霧が取れ、東側が見えてきた。景色に飢えていた私は立ち上がった。街が見える。霧が動いて、東側が隠れ、今度は西側が見えてきた。そして、越えて来た越百山が遠く、高く見えてきたのだ。ああ、人間の足って凄いなあ！

さあ、2日目の懇親会はもうすぐだ。木曽殿山荘着約8時間。マダムH子はジュースで乾杯。Sさんは身体のケアに余念がない。

夕食の内容がどうしても思い出せないのは、翌日の集合にまたビリにならないようにと思案していたからだろうか？ 6時半就寝。夜、外に出た。光り輝く星空に、明日の天気を期待する。南東方向で音はないが、稲光を発している。この地区に落ちたのだろう。

3日目、朝焼けが眩しい。5時半出発。山を離れる道中は物悲しい。登って下って、下って登った。そして下山。小屋から10分ほどで木曽義仲の力水で喉を潤す。旨

い！ 義仲も、ほっとひと息ついたらに違いない。ワラジを脱いで足も清めたか？

一人ずつ北沢吊橋を渡り、里へ近づく。途中、御嶽山が見えた。頂上は今、どのようになっているのであろうか。ここから見えるあの山は、間違いなく堂々として美しい。定時内着。昨日行き交った若者たちも帰ってきた。マウンテンバイクを車に積んで帰って行く若者もいた。かつこいい。

タクシーを待つ間の反省会。皆さん健脚です、反省材料は何もありません。毎日、休むたびに次々出てきたリンゴ、ナシ、キュウリ、トマト、美味しい飲み物、どなたもドラえもんポケットをお持ちです。私の胃袋は潤いました。ご馳走さまでした。Tさんは、山道具を搭載した車に乗って次の山に走り去った。山行委員になったS女史さん、楽しい企画作ってね。今回山行委員のSさん、そして楽しく気持ちの優しい陽気な山女、山男の皆さん、お世話になりました。楽しかったです。無事、山岳会デビューできました。

(志波喜久子)

黒部川源流・赤木沢と黒部五郎岳を巡る山行

8月30日～9月4日、5泊6日の「第6回北アルプス全山縦走シリーズ」に参加した。

今回は特に赤木沢の遡行に惹かれての参加だったが、沢登りが組み込まれることでザックが12kgもの重量となり、連日8時間を超える歩行を完歩できるか、出発前日まで、不安は拭えなかった。

ところが登山初日、折立から太郎平小屋までの急登で汗を流し、背中への重さに振られながら登っていくうち、あれほど重く感じられたザックが気にならなくなり、心なしか足取りも軽くなってきたのだ。予報では「曇り」「雨」ベースだったが、好天に向かっていくように、明日からの山行に期待が膨らんでいった。

赤木沢へは宿泊した薬師沢小屋のテラスから鉄製のハシゴを下り、奥ノ廊下と呼ばれる黒部川本流の左岸をへつたり、高巻きしたりして、2時間ほど遡上。美しい自然の堰堤まで来ると、そこが赤木沢出合だ。期待に違わず、変化に富んだいくつもの滝、美しいエメ



赤木沢出合の黒部川本流でバンザイ

ラルド・グリーンの釜、高山の樹林の景観を映したナメ滝など、雲一つない快晴に恵まれ、最高の沢歩きを満喫した。リーダーの勝山さんが、初心者からベテランまで総勢14名もの大人数パーティを冷たい流れに胸まで浸かりながら、根気よくサポートしてくださり、感謝の念に堪えない。

翌日は憧れの雲ノ平へ。初日に下りた薬師沢から、標高差600mほどの急登だ。息を切らしながら登り切ると木道が続く360度の景観。行く手には祖母岳、祖父岳、屋根に布団を満載に干してある可愛いらしい雲ノ平山荘を右手にして、薬師岳、赤牛岳、水晶岳、

鷲羽岳、三俣蓮華岳など2800mを超える山並み眺めながらの歩行を満喫した。

5日目は黒部五郎岳へ。昨年ピークを踏めなかったメンバーの思いが叶い、快晴のなか全員で登頂！重いザックを担ぎ、汗をかき、一足一足歩いてきた思いと北アルプスの絶景に胸が熱くなった。

今回は全行程快晴に恵まれ、なによりも北海道支部をはじめ、他支部の方々と楽しい時間を共有することができ、思い出深い山行になった。末尾になりましたが、太郎平小屋グループの五十嶋様、各小屋のスタッフの皆様には大変お世話になりました。ありがとうございました。

(東京多摩支部 植草由利)

錦秋の燧ヶ岳と帝釈山・田代山

10月体育の日の3連休、山行委員会の尾瀬山行に参加させていだいた。紅葉に染まる尾瀬の燧ヶ岳と帝釈山・田代山に登るプラン。今回は同じ千葉支部の仲間5人で誘い合って参加した。

日光から参加者16人を乗せたマ

イクロバスは尾瀬御池へ。バスを乗換えて到着した沼山峠は、午後の帰り客がいくらかいるが、夏のようになにぎわいはない。ゆつくりと展望台まで登ると、木々の間から大江湿原の草紅葉が見えた。湿原まで歩いていくと、長蔵小屋の女主人・平野紀子さんが途中で出迎えてくれ、平野家の墓所を案内してくれた。宿泊した長蔵小屋での夕食後には、囲炉裏部屋を特別に用意してもらい、紀子さんを交えて楽しい一時を過ごさせていたいただいた。尾瀬と平野家の物語を身内の方から直接伺えるとは思ってもみなかったもので、とても感激した。

翌8日は朝から秋晴れ。尾瀬沼一周のグループと燧ヶ岳登山の2グループに分かれて行動した。私たち燧ヶ岳組7人は、午前6時半に長蔵小屋を出発。途中から尾瀬沼と原を見下ろしながら、ゆつくり4時間掛けて到着した燧ヶ岳山頂は、休む場所もないたぐさんの人。

御池への下山道は、数日前に降った雨でぬかるみ、さらに滑りやすい岩がごろごろしていて歩きにくい。それでもほぼコースタイムで歩き、14時15分、御池駐車場で

尾瀬沼組と無事合流できた。

この後、マイクロバスで宿泊する湯ノ花温泉の民宿へ。早速、近くの共同浴場で汗を流す。集落には昔ながらの素朴な共同浴場が4軒あり、女性陣は湯巡りをしたそう。茅葺きの古民家で食べる夕食はイワナの塩焼き、イワナの刺身、山菜など山の恵みをいっぱいいただく。岩魚の骨酒は香ばしくて絶品だった。酌み交わすうち、同行の先輩方とも打ち解けて山の話が弾む。

翌9日は民宿を6時半に出て、松枝岐村から未舗装の林道に入り馬坂登山口へ。20台ほどの駐車スペースと綺麗なトイレがあった。8時25分登山口。1時間ほどの急登で帝釈山山頂に着くと、会津駒ヶ岳に連なる峰々の眺めが素晴らしい。そこから緩やかに1時間半進むと田代山の避難小屋へ着いた。小屋の中には弘法大師様が祀られていた。田代山の山頂は広々とした高層湿原で、草紅葉の中に木道が延びていて気持ちがいい。猿倉への下りは急だったが、ドウダンツツジの紅葉がちやうど見ごろを迎えて、足の疲れを癒してくれた。下山口に14時。マイクロバスが待

っていてくれて、ここから日光の駅へ向かい解散となった。

3日間、天候にも恵まれて錦秋の旅を終えることができた。いろいろ手配してくださった山行委員会の方々、ご一緒させていただいた参加者の方々に感謝いたします。(千葉支部・三田博)

アルパインフォトクラブ 第25回写真展「心に映る山々」

2017年度の写真展は、例年より約1月早い10月12日から18日まで、東京都新宿区四谷のポートレートギャラリーで開催された。例年より早くなったのは、同ギャラリーの人氣が高く、多数の利用申込みが殺到し、この時期でしか空きがなかったためだ。

今年度は25回目ということもあり、写真集作成などの企画を検討したが、費用もかさむため、通常の全紙判展示のほか、山で出会う動植物の写真を半切判で展示することにした。会員より作品を募り、審査の結果10点の動植物(動物2点、植物8点)が選ばれ、合計で50点の作品が展示された。展示方法



会場の企画展コーナー

も国内・海外別に1月から順に月を追う形で展示し、最後に企画展の動植物の写真を置き、来場者が四季の移ろいを感じることができるようにした。

鋭い岩峰や厳冬の山岳など荒々しい風景の写真が多いなか、かわいらしい動物や可憐な高山植物の写真に多くの来場者、特に女性とその前で足を止めた。「きれいね」「どこに咲いているのかしら」などの声が聞かれ、企画展は好評であった。

ここで簡単に写真展25年の歴史を振り返ってみよう。第1回は1993年で、三省堂のギャラリーを借りて行なった。このときはタイルの壁にカーテンレールを付け

て吊るすなど、すべて会員の手作りで行なった。同所で第9回まで開催し、第10回から第13回までは新宿野村ビルの特設会場で開いた。そして、第14回から現在までの12回をポートレートギャラリーで行なっている。このギャラリーはスペースもあり、また、照明装置も整っているので写真が引き立って見違えるようになった。

なお、今回の来場者は560名を超え、昨年を上回った。また、作品はこの後、年次晩餐会（12月2日）で展示される。その後、伯耆国山岳写真美術館（4～5月）、酒田市総合文化センター（6月）、長野市柏与フォトサロン大門（9月）、高尾599ミュージアム（10月）で巡回展示される予定である。ご来場いただければ幸いである（詳しい日程は後日、会報「山」に掲載します）。

（松永秀和）



支部

だより



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

信濃支部

支部創設70年記念集會を
美ヶ原で開催

昭和22年6月、戦禍を逃れて取り外されていたウエストン師のレリーフが修復され、再び上高地・梓川畔に設置されたのをきっかけに始まったウエストン祭。そして、それを機に創設された信濃支部。



美しノ塔での記念撮影

今年で満70歳を迎えた。初代の支部長を務められたのは、このウエストン碑の再建に尽力され、当時大町市に疎開されていた横有恒元会長だった。

昨年70回目を迎えたウエストン祭は、第1回「山の日」記念大会が上高地で開催されたこともあって、支部として「ウエストン祭70年のあゆみ展」を開催するなど、行政や地域と連携しながら、関連イベントとして大いに盛況を見せた。ただし、支部70歳のお誕生日会の方は、山岳会らしく山歩きを交えて山小屋で慎ましくやろうじゃないか……ということになった。当初は北アルプスで、とも考えたが、車でのアクセスも必要なことを考慮し、美ヶ原で開催することにした。紅葉シーズンたけなわの10月の連休で、当支部に所属する多くの山小屋関係者には大変申し訳なかったが、ほかに日程が取れなかった。



挨拶をする森武昭前会長

10月7日(土)午前11時、美ヶ原山麓の松本市三城に集合。ダテ河原コースと八丁ダルミコースに分かれて登山開始。当初は茶臼山からのコースも予定したが、濃い霧が予想されたので、2コースに絞った。予報では雨も予想されたが、幸い雨具を着けることもなく、かつて「キリハラ」と呼ばれた美ヶ原の故事に相應しい霧の中を歩き、美しノ塔で合流。15時には全員無事会場の山本小屋に到着した。高齢化が課題となるのは当支部でも同様だが、85歳の会員が遅れることなく登る姿は「高齢化? それが見えた」と語っているように見えた。

17時からは、フルート奏者の桂聰子さんを迎えての「山のコンサート」を開催。日本山岳会会員だった父君重英氏(画家・故人)の縁により、山の歌を交えての楽しいコンサートとなった。

その後、夕食会、懇親会へと続き、山小屋での楽しい語らいの時間を過ごした。信濃支部と特に親交の深かった森武昭前会長も登山から参加していただき、大変ありがたく感激した。

翌8日は、前日の霧とは打って変わって雲一つない見事な快晴。まさに360度の大展望が広がり、富士山をはじめ、南・北・中央アルプス、八ヶ岳から北信濃の山々など中部地方のほとんどの山を見渡すことができた。

美しノ塔で記念撮影後、登山組は全員で百曲がりコースを下山。送迎バス組と三城で合流し、解散する。

連休にもかかわらず、ほぼ貸切で会場をご提供いただいた山本小屋に心から感謝したい。

(米倉逸生)

著者	書名	頁/サイズ	発行者	発行年	寄贈/購入別
R.ソルニット(著)東辻賢治郎(訳)	ウォークス: 歩くことの本質	517p/20cm	左右社	2017	出版社寄贈
永野敏夫(編)	「不盡」第2巻(静岡支部報No.51~75号合本)	428p/26cm	JAC静岡支部	2017	発行者寄贈
Purandare, Nandini (ed.)	The Himalayan Journal (Vol.72)	490p/22cm	The Himalayan Club	2017	発行者寄贈
The Mountain Club of South Africa (ed.)	The Journal of the Mountain Club of South Africa (No.119)	214p/23cm	The Mountain Club of South Africa	2017	発行者寄贈



図書紹介

斎藤 繁著

登山を楽しむための健康トレーニング



2017年7月
上毛新聞社刊
A5判 212頁
1500円＋税

「山の日」の制定を待つまでもなく、山登り（トレッキング）の愛好者は確実に増えている。週末ともなれば、地元の群馬県内のちよつとした山でも、登山口の駐車場は満杯だ。

30年ほど前、山を盛り上げたのは、中高年登山隊と言われた「おじさん」「おばさん」たちだが、いまや最新の機能性ウエアと用具を身に着けた、若い人たちも幅を利かす。一方で、自らの健康不安と筋力の衰え、加えて腰が重い、膝が

シクシク痛む……。こんな現実を抱えながらも、なお、山や自然の中の逍遥欲求に衰えを見せない「おじさん・おばさん」たちは少なくない。

「どうにかならないか」。切実な願望に応えてくれるのが本書『登山を楽しむための――』だ。

冒頭の総論で、斎藤さんは「生涯継続的に取り組める運動こそ、健康長寿に貢献……（中略）何歳になっても取り組める登山は理想的……」と、山登りの効用を説き、そして、安全で快適な山登りを支える適切な日々のトレーニングの必要性を訴える。

さて、そのトレーニング。本書で斎藤さんは、身近な公園や赤城、榛名、妙義など群馬県内の山岳コースをリストアップ。「この山道は何を意識して上り下りしたらいいのか」に回答を与え、地図や写真

を織り交ぜて解説する。とりわけ、「医学的な見地から、山登りの体への影響を考え、真の健康増進山登りはどんなスタイルか……」にこだわるのが本書の最大の特徴だろう。医者ならではの「登山書」、登山年齢を先に延ばしたいと切望する、シニア（その予備軍）待望の書と言っている。

斎藤さんは生粋の上州っ子だ。高崎で生まれ育ち、現在は前橋市内に住む。大学の医学部教授という、権威主義的ないかめしいイメージを思い浮かべがちだが、斎藤さんは違う。むしろ、穏やかに子どもたちを包み込む、小学校の先生といった印象を受ける。

来春には、斎藤さんを塾長に、この本を教科書にした「健康登山塾」が、群馬支部主催で開講される。脚力・体力の減退で山登りの前途に悲観的な身として、第1期の塾生に、ぜひ駆け付けたいと思っている。地道なトレーニングを積み重ね、山登り人生をまだまだ先に延ばせる――。この本を読んでそう感じているからだ。

（武尾 誠）

会務報告

平成29年度第6回(10月度)理事会 議事録

日時 平成29年10月11日(水)19時00分～20時35分

場所 集会室

【出席者】小林会長、重廣・野澤・中山各副会長、神長・永田・

古川・谷内各常務理事、清

登・斎藤・星・近藤・波多

野各理事、平井監事

【欠席者】大久保・安井各理事、石

川監事

【オブザーバー】節田会報編集人

【審議事項】

1・「山のお弁当」に関する(株)アーバンとの契約締結について

「山のお弁当」に関する(株)アーバンの「商標権及び名称使用権設定契約」の締結について審議した。

(賛成13名、反対なしで承認)

【協議事項】

1・記念事業について(重廣)

記念事業委員会の「120周年事業策定・推進(案)」について協議した。

2・計画書について(重廣)

登山計画書の提出および計画のチェック体制について協議した。

3・冊子「山のエチケット(仮称)」について(中山)

科学委員会の提案による冊子「山のエチケット(仮称)」の発行について協議した。

4・復活会員制度について(永田)

復活会員の入会金について協議した。

5・広島支部「幌尻岳事故」について(中山)

広島支部「幌尻岳事故」について情報確認と今後の対応について協議した。

【報告事項】

1・9月受付分の入会希望者9名、

準会員入会希望者4名について入会承認を行なったとの報告があった。(小林)

2・富山支部からの寄付金受入事前申請および寄付金14件について報告があった。(古川)

3・支部合同会議の状況について報告があった。(永田)

4・年次晩餐会の概要について報告があった。(永田)

5・秩父宮記念山岳賞審査委員会より「本年度は該当者なし」との報告があった。(谷内)

6・A V S A R協議会の発足会の状況について報告があった。(中山)

7・YOUTH CLUB委員会の外部への業務委託契約の内容について報告があった。(中山)

8・日本ヒマラヤ協会創立50周年について報告があった。(中山)

9・「ルームの電灯番員の交換」の経緯とコストについて報告があった。(永田)

10・「山」10月号の発行について報告があった。(神長)

【連絡事項】

1・中央大学山岳部90周年記念祝賀会 11月19日(日)13時～ 中央大学駿河台記念館 2階ホール

【今後の予定】

1・第33回宮崎ウエストン祭・記念山行(宮崎支部) 11月3日(金)4日(土)

2・平成29年度第1回評議員懇談会 11月15日(水) 17時～19時 104号室

3・熊本支部設立60周年記念式典および記念登山 11月18日(土)～19日(日) 熊本市「アークホテル」

4・年次晩餐会 12月2日(土) 12時30分～(受付開始) 京王プラザホテル

ルーム日誌 10月

2日 総務委員会 高尾の森づくりの会

3日 常務理事会 スケッチクラブ

4日 図書委員会 山行委員会

5日 学生部 YOUTH CLUB

6日 平日クラブ 山岳研究所運営委員会 スキークラブ スケッチクラブ

11日 理事会 学生部 フォトクラブ スケッチクラブ 休山会 山想倶楽部

12日	支部事業委員会	山岳地理
13日	クラブ	九五会
13日	学生会	
16日	総務委員会	資料映像委員会
17日	会 会員データ管理システムWG	
17日	スキークラブ	
18日	三水会	YOUTH CLUB
19日	UB つくも会	
19日	科学委員会	マウンテンカルチャークラブ
20日	YOUTH CLUB	
21日	山の自然学研究会	
24日	デジタルメディア委員会	
24日	遭難対策委員会	フォトクラブ
25日	緑爽会	里山歴史研究会
26日	改革事業推進委員会	学生会
27日	部 01会	山遊会
27日	総務委員会	緑爽会
30日	青年部	緑爽会
31日	常務理事会	家族登山普及委員会
	10月来室者	488名

会員異動

土田幸雄(4241)	17・10・16
橋本祥案(4375)	17・10・13
建石八重(5380)	17・9・14

中山真明(8100)	17・10・6
有澤辰彦(9974)	17・10・15
宮本数男(10622)	17・10・12
大山 昇(11320)	17・8・22
山平宏人(16061)	17・10・22
宮地正典(16074)	17・10・8

◆高松で「安全のための知識と技術公開講座」

公益社団法人日本山岳ガイド協会代表(理事長)・磯野剛太氏「山と自然を安全に楽しむために」、日本山岳ガイド協会認定登山ガイド、山岳ライター・小林千穂氏「心に残る山登り」の講演。映像や資料を交え、より安全に登山を行なうための知識と心構えについて講演します。参加者に「安全登山ハンドブック」などがプレゼントされます。

日時 11月28日(火)18時30分
場所 サンポートホール高松 5F第2小ホール(高松市サ

I N F
O R M

インフォメーション

A T I
O N

退会

蒲生明登(4505)	信濃
和田光弘(12154)	茨城
山田雅昭(12692)	広島
須川真一(13299)	



◆高松で「安全のための知識と技術公開講座」
ンポート2-1 JR高松
駅から徒歩2分)
定員 先着300名。事前予約不要。入場無料。
問合せ 四国山岳ガイド協会事務局 佐藤孝雄 TEL 087 7122-0036

◆編集後記◆

●10月末は「上越のマッターホルン」と呼ばれる大源太山に行ってきました。残念ながら時間切れで登頂できず、おまけに翌日は台風の余波で終日雨。早速、観光モードに切り替え「塩沢つむぎ記念館」や「北越雪隠」を著した「鈴木牧之記念館」などを見学したのち、八海醸造が経営する「魚沼の里」で蕎麦をいただいて帰京しました。

●魚沼はお米や野菜はもちろん、お酒のいい所。とりわけ山仲間たちに大人気だったのは、温泉宿で呑んだ旧・塩沢町のお酒「鶴齢」でした。まさに「名山の麓に銘酒あり」で、大のビール党の私でもいける旨口の銘酒でした。こんな調子で、全国各地の「いい山いい酒」を訪ねながら、馬齢を重ねていくことでしよう。

(節田重節)

日本山岳会報 山 870号

2017年(平成29年)11月20日発行
発行所 公益社団法人日本山岳会
〒102-0081
東京都千代田区四番町5-4
サンビューハイツ四番町
TEL 東京(03)3261-4433
FAX 東京(03)3261-4441
発行者 日本山岳会会長 小林政志
編集人 節田重節
Eメール: jac-kaiho@jac.or.jp
印刷 株式会社 双陽社